

## 平成29年度 第3回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：平成29年10月27日（金）14：30～16：30
- 2 会 場：小田原市生涯学習センターけやき 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、角田委員、柏木委員、栗畑委員、瀬口委員、土橋委員、  
深野委員
- 4 職 員：関野理事・文化部長、石川文化部副部長、遠藤文化部副部長、大島生涯学習課  
長、鈴木文化財課長、杉崎図書館副館長、尾沢スポーツ課長、吉野青少年課長  
（事務局）  
湯浅生涯学習課副課長、濱野生涯学習課副課長、高橋生涯学習係長、相澤主査
- 5 傍聴者：なし

### 6 概 要

#### 1 文化部長挨拶

関野理事・文化部長が挨拶をした。

#### 2 報告事項

- (1) 社会教育事業の結果及び予定について（平成29年8月～平成30年2月）  
資料1に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。

#### 3 協議事項

- (1) 提言書骨子案について  
生涯学習課長から資料2-1及び2-2に沿って報告した。

【木村議長】 資料2-1の3つの視点のうち、今回は特に、人材の負担軽減について議論するということであるが、この3つは完全に重なっている。人材の負担軽減とって、なかなか人材が育成されてこない、いつまでも役員等をやらなければいけない。ボランティア団体もそうであるし、各地域の団体も、会長はなかなか変わらずに長年勤めるという状況がある。自治会にしても、社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会にしても、育成をしていないということではないのだが、なかなか新しい人は出てこない。このようにしたらいいのではというご意見があればお願いしたい。

【深野委員】 前回の会議で意見が出なかったということであるが、人材の負担軽減と言われた時に、何をイメージするのが難しい。例えばボランティアで、役をやっていると、何でもその人がやることになってしまうので、もっと仕事を分散させた方がいいという意味での負担軽減なのか、議長がおつ

しゃったように、一人の人がいつまでも役をやっていて、後継者が育たないという意味での負担軽減なのか。いろいろな意味がある。後継者の話であれば、人材を見つけて育てるという2つ目の人材育成の視点の話になってしまうし、一人の人が何でもやっているということも、結局人が多くいれば分担できるが、いなければ、あれもこれも一人に集中してしまう。これもまた人材育成の問題になってくる。3つ目の視点だけ独立して議論できるかと言うと、答えの部分になると1つ目や2つ目の視点の話になるという気がする。これだけを取り上げる意味がわからない。いわゆる対症療法的な負担軽減があるのかもしれないが、この案にあるように、多数の人物が可能な範囲でゆるやかに関わるということも、多数の人を確保するという人材育成が前提にないと答えにならない。

【木村議長】 確かに1つ目から3つ目は全てに関わってきてしまう。我々の単位自治会では、何か問題が起きた時は会長が出て行くが、後はほとんど副会長2人と会計の、3人で力を合わせてやっている。連合自治会も同じである。副会長2人と会計で卒なくやっていただいている。深野委員が言ったように、人数が多いと仕事を振り分けられるのだが、やってよと言ってもなかなかやってもらえないことが頭の痛いところである。人材育成ができていけば、その問題も解決できるのではないかと思う。笹井委員いかがか。

【笹井副議長】 地域づくりも教育も、一人ががんばってもだめで、人と人のつながりが大事である。建物を建てればよいとか、道路を整備すればよいという話ではなく、人をどう育てるのか、あるいは人が持っている能力をどうやって引き出すかの、人が活躍できる場をどう作るのか、そのような面に着目することがとても大事である。

育成というと教育的なものを連想する。それはもちろん中心的なものではあるが、もっと広く、人が様々なところで繋がり、いろいろなことができる場を整備したり、その機会を作ったりということが、この社会教育委員会会議での中心的な観点であると思う。その意味では、いろいろな場面での人材育成、広い意味での人材育成が重要である。ただその時に、地域の人達に教育するというのはおこがましい話で、むしろ彼らの持っている力を引き出す、十分に活動できる機会や場を作る、そのようにやっていくのだと思う。特に学校と地域の連携のためには、そういう切り口が大切である。

【柏木委員】 自分は曾我地区に住んでいる。自治会長、民生委員、健康普及員等おおよそ2年任期であるが、8自治会の持ち回りである。曾我地区は連合自治会長がしょっちゅう変わっていると思われるかもしれないが、そうやって各自治会でいろいろな役を持ち回することで、人材の裾野が広がっている

と思う。人材育成より、人材を登用する事、あの人はこういう力をもっているということを把握し、その人たちに活動して頂くことが重要である。例えば小学校や中学校に何か協力することがあり、それならばあの人がいいよということがあるとよい。地区の人口が1,000人ほどなので、誰は何が得意なのか、大体わかっている。例えば学校の稲作体験だったら、誰と誰ならばきちんとできる等ということが、わかっている。一つの役を受ければ、責任も伴い大変だが、幸い経験者が多いので、役をお願いできるかと尋ねると、協力をしていただける。そういう意味で、育成はおこがましいのかなと思う。例えば学校の先生で、英語ができるということであれば、それを子どもたちに教えてもらう。そういう情報は地域の中でわかっているのです、改めて人材の育成講座をやるというよりも、今いる人材を活用していく方がよいのではないかなと思う。

【木村議長】 笹井委員もおっしゃったように、人を育成するなんて、おこがましい話である。最終的には顔の見える付き合いをしていけば、何とかなるという思いでいる。今我々の自治会もまちづくり委員会を運営しているのだが、最終的には、私が責任を取るので自由にやらせてもらう形で、私はほとんど分科会等には出て行かなくても、自分たちで考えてやっている。分科会長になるのは嫌だと言いながらも、2年・3年で役員が変わっている。仲間が多いと仕事が分担できる。人数が少ないとどうしてもそうはいかない。負担の軽減については、最終的には普段からの付き合い方が大切で、顔の見える付き合い方をしていけないといざとなった時になかなかできていかないと思う。

【深野委員】 ここで言う負担は、あくまでも、テーマが「学校と地域の連携のための」ということである。一般論としての人材育成のことではなく、あくまでも地域と学校で連携するための人材の負担軽減と理解すると、つなぎ役の人を設けるということである。今日は来られていない有賀委員や益田委員のような、学校ボランティアやPTAをされている方が学校側で手を伸ばす人。地域は、例えば自治会や社会福祉協議会の方が手を伸ばす人。その両方から手を伸ばして握手して連携する場があればいいのではないかな。負担軽減という意味が、連携に関わる人材ということであれば、既存の活動している人達が連携できる場を作ることが一番大事だと思う。その中で、お互い何ができるのか話し合い、役割を分担していく。そのような分担の話し合いをやっていく必要があるのではないかな。

【木村議長】 栗畑委員が校長をされている千代中学校は、いろいろなことで自治会と密接なつながりがあると思うが、いかがか。

【栗畑委員】 前校長が、地域と協働を目指す学校づくりという目標を立ててから4・5

年目になる。特に上府中地区は隣の千代小の学区なので、とても親密にやっている。しかし、曾我、下曾我、豊川地区はどうかというと、同じ千代中学校区でありながらも、なかなか声をかけにくく、また、かかりにくい。では千代小だけの、上府中地区だけでいいのかというとそうではなくて、明日も豊川地区の県民祭がある中、地区の方16人が手をあげた。曾我地区はそのようなことをしなくても、地域の中から手をあげてくれる。地域間格差は明確にある。同じ中学校区でありながら、こんなに差があるのかと実感している。一小一中の国府津小中学校のようところは連携しやすいと思うが、豊川小学校のように、鴨宮中学校に行く子と、千代中学校に行く子に分かれるというところが、学区内にいくつかある。そのようなところだとかなり難しさがある。

昔は、何かあると何でも学校に言ってくるという気持ちが学校側にもあったのだが、今はそのような意識は全くないので、ぜひ学校に地域への参加を投げかけて頂きたい。夏休みもいろいろと投げかけてくださったけれど、中学生は部活の試合等があって、地域になかなか参加できない。そのような理由から、参加がゼロという行事もあったのだが、めげずにまた違うことを考えてくださる自治会長さん達が多くおり、とてもありがたいと思っている。ただ、それが他の中学校区でもできるかということ、なかなか難しい。私は豊川と上府中のまちづくり委員会に出ているが、全然違う。雰囲気も違うし、やろうとしている方向性も違う。地域の中では、特に発災時、中学生は救護等の活動の担い手になるはずである。だからこそ曾我地区のように、中学生全員の顔を知っているというような、顔の見える関係が理想だと思う。人材の負担軽減については、負担はあるのだけれど、地域のために何かしたいという気持ちを小さい頃から育てていかないと、突然大人になってできるはずがない。自分がどれだけ地域のことをやっているかと言えば、全然やっていない。ただ、連合会長さんの顔は知っている。地域の行事に行っているかと言えばほとんど行っていないが、退職した後は頼むなど、自治会長さんから言われている。つばをつけられるような人たちが地域にいる。今は自治会に入らない人が多くなってきているのが課題で、城南中学校に勤務していた時、ある地区では住民の半分も自治会に入っていないという話を聞き、驚いた。その人達を取り込める方策は何かと20年近く考えているが、よい答えが出てこない。

【笹井副議長】

学校と地域の連携に焦点を当てて申し上げますと、学校は学校で一つの完結した世界である。地域は地域、PTAはPTAという世界があって、世界がそれぞれ違う。別世界という用語があるかもしれないが、違った世界の人達に関わり合うということが基本になる。その時に何が大事かと

いうと、一つは共通の目標、共通のつながるツール。みんなですべてをやりましようというものが無いと繋がらない。なぜかと言えば、ボランティアだからである。お金をもらわずに、自分の好きでやるというのは、意気に感じるとか、こういう理由で継続してやっという気持ちがあるから。自分が意気に感じたり、学校が意気に感じるためには、お互いにメリットが生じるような共通の目標、ネタがないといけない。

学校と地域の連携の場合は、それは子どもの成長だと思う。親達が学校を手伝ったから、子どもがこんなによく育った。学校にとってみれば、手伝ってもらったから先生の負担が軽減され、子どもとよく関われるようになり、子どもがこんなに良くなったなど、子どもを通したメリットが、連携にとってとても重要である。みんなですべて小田原の子どもを育てようという大きな目標、または、この地区は危ないからみんなですべて防犯しよう等、地区によっていろいろと違いはあるだろうから、地区ごとの細かい共通目標でよいので、その目標をみんなですべて共有するということがとても重要である。いろいろな人と上手に関わって、目標を共有できるような能力、センス、知見を持った人がとても大事だと思う。これは学校の中に限ったことでなくてもいい。地域の祭りをやるから手伝ってと学校にお願いした時に、それは子どものためになるからやりましようと言わせるような人材がとても大事だと思う。それは個人の資質の問題もある。大企業の重役をやっていた人が、地域で活動するとトラブルを起こすということが結構ある。自分も経験があるが、2年前にここを退職したと、ある銀行の名刺をもらった。今は何をされているかと聞いたら、何もやっていないとのことだった。なぜ昔の名刺をよこすのか。仕事上のつながり方と地域のつながり方は違う。地域は顔の見える関係、お互いさまの関係が本当に大事である。学校と地域の連携においては、自分の意見は持っていて、あの人には世話になっているから、今回はあの人を顔を立ててやろうという柔軟性や、お互いさまの関係から生まれてくるその人のセンス、つながり方の能力が、地域と学校、両方の人材にとって必要である。

【柏木委員】

曾我小学校が去年からコミュニティスクールに指定され、地域が学校の方針に協力して行こうという姿勢を委員のみなさんはお持ちである。その中で、大人ばかりでなく、子どもの意見もきちんと聞こうと、昨年度は自分達コミュニティスクールの委員が千代中学校に行き、曾我小学校出身者の子ども達全員に集まってもらい、曾我小学校を卒業してどうだったか、後輩たちに何を伝えたいか、意見を聞いた。それを月に1回ある、まちづくり委員会、社会福祉協議会、各種団体が全部集まる会で、委員長から、子どもたちからこういう意見がありましたということを地域の方

に報告し、共有した。今年は小学6年生全員に集ってもらい、何か大人に、地域に言いたい事という題で話してもらったところ、大人たちがうっかり見逃していることを子どもの目線できちんと意見として出してくれた。今度の日曜日、自治会長等各種団体の長が集まる席があるので、委員長から、小学校6年生からこんな話があったと報告をさせていただく。地域と学校の連携の中に、小学生中学生の思いも忘れずにコーディネートできたらよいと考えている。

【木村議長】 小田原市内も地域差があり、一律でこれをやれと言うのは難しい。今の柏木委員の話聞いていて、そういう活動はとてもよいと思った。まちづくり委員会が26か所できあがったが、それでもまだ地域によって温度差がある。それが一つでも二つでも、分科会が非公式でやってくれるようになるといいのかなと思っている。いつも校長と話をするのだが、一人やんちゃな子がいると、どうしようもないから地域で面倒みてくれないかと学校から言われるが、どこの人だかわからない。自治会名だけでも教えてくれというのだが、個人情報があるので、学校側もなかなか教えてくれない。せめてどこの自治会にいるからという情報を流してくれると、地域も協力できるのだが、なかなか学校もそこまで言ってくれない。困ると電話でお願いがくる。自分は学校によく行くので、校長でも教頭でも一般の先生でもわかるのだが、一般の自治会長が学校に行くことはほとんどない。そういうところから、学校と自治会の話し合いの場があるといいと思う。そこが、人材育成、人材の負担軽減にも関わってくるのかなと思っている。

【瀬口委員】 どういう能力の人が欲しいとか、どういう行事をするとか、企画が上手な人がいる。そのような中心になる人は決めておいて、その他の人数を集めるのは、広報力だと思う。広報手段としては、少し前はフェイスブックが効果的だったが、今は年配のツールになっているので、フェイスブックではあまり集客できない。今はインスタグラム映えが流行っているので、インスタグラムに素敵な写真を載せて広報したら人が集まる。ツイッターも集客力がある。ただ、みな段々とSNS疲れしてきているので、紙面の方がよく人が集まるようになってきた。集めたい対象の人がよく行くお店等にポスターを張ってもらうなど、どういう対象の人を集めたいかによって、様々な媒体で広報するのがよい。ただ、それは危険と隣り合わせでもある。学校には守らなければいけない大切な子どもたちがいるので、誰でも彼でも来られても困る。それを精査するのは誰なのかはわからないが、協力してくれる人に多く来てほしいのであれば、広報力が重要である。

【木村議長】 瀬口委員が言うように、どうしてもセキュリティの問題があるので、誰でもいいからと学校に入って来られたら、校長先生も生徒を守り切れない。そういう問題があるので、普段からいつも顔を合わせて話をしていれば、校長先生も職員も、あの人かとわかる。お互い何か接点を持たないとなかなかうまくいかない。例えば千代中学校の場合は、教育長がいるので、防災訓練等を生徒や自治会と一緒にやっている。しょっちゅう顔を合わせているので、校長も特別とは思っていない。ただ、これを他の学校でやろうとすると、なかなかうまくいかない。できたら、お互いに普段から顔を付き合わせて、先生と話し合う。学校に地域の自治会が入って話すのは、年二回くらいである。普段は学校に入る機会はなかなかない。そういうことを、これからのテーマとして考えたほうがよい。

【笹井副議長】 顔の見える関係を普段から作っておくことはとても大事である。それにより何が生まれるかという、一つは信頼関係ができる。今瀬口委員がおっしゃったように、不審者に学校に入ってきてもらっては困る。一方、子どもたちのために一肌脱ごうという人もたくさんいる。そこを区別するのは、信頼できる人が、この人はちゃんとした人だと思えるかどうか。校長自ら、あの人だったら大丈夫と思えることがとても大事である。いつだったか、一部の学校で、地域の中で協力してくれる人のリストを作ったことがあった。例えば天井が壊れたとか校庭を掃除する、花を植える等いろいろなリストを作ったのだが、そのリストに載っていたある人が、かえって学校の中でトラブルを起こしたことがあった。リストで名前さえわかればいいというものではない。校長は全てを把握はできないので、その人がどういう人かということ、地域の人同士で把握し、校長が信頼している地域の人に、この人はどんな人かと聞いた時に、子どものこと大事にしているちゃんとした人ですということが言えて、それならぜひ来て欲しいという話ができる信頼関係を築けることが望ましい。

もう一つは、先ほど議論になっている、お互いさまの関係である。互酬性というのだが、つまり、いつも世話になっているから、今度は地域の祭りに子どもを派遣しようとか、いつも世話になっているから、体育祭にこういう人呼ぼうかということである。これにより、様々なことが可能になってくる。一番よいのは、学校が地域のいろいろな会議に顔を出すこと。例えばコミュニティスクールであれば、学校運営協議会があると思うので、そこに顔を出してもらってもいいし、もっとインフォーマルな正規の町内会の会合や、地域の祭りの準備会にも本当は校長が時々顔を出してくれること。学校の先生は忙しいので、難しいかもしれないが、顔の見える関係を普段から作っておくことがとても大事である。

- 【土橋委員】 学校運営協議会では、地域の方の意見を聞くのか。
- 【木村議長】 学校運営協議会には、連合自治会の会長と育成会、民生委員などが入っている。全部に自治会長が入っているわけではない。
- 【土橋委員】 何を言いたいかという、笹井委員がおっしゃった、お互いさまをテーマにした場合、学校運営協議会にせっきやく地域の方が参加しているのなら、その場でこういうテーマを出しながら話し合えないものかということである。学校運営協議会は教育委員会がやっている話であるのだが、教育委員会ではそこをどう考えているのか。そこを話し合う意味が大いにあるのだろうと思う。
- 【木村議長】 最終的に、段々税収は減ってくるし、行政もいろいろな問題があるので、新しい施設は作れない。では何を使うかと言うと、学校の空き教室を地域に開放していただかない限りは無理だと思う。そう考えると、みんなが学校に足しげく通って、顔の見える付き合いをした方がいざとなった時にいいのではないかと思う。ボランティアについても、ある程度行政の方も考えてもらって、日当でもいいから払えるようになってくると、ボランティアも増えてくる。お金は出さないでやることばかり多くてというのが今の気持ちだから、そこがうまく調和が取れてくるといいのではないか。そうすると学校についても、地域の間人みんなと顔の見える付き合いができるのかなと思っている。
- 【深野委員】 もともとは、生涯学習の施設が老朽化しているから、学校の施設をもっと使えたらという話の一つのきっかけだったと思う。そうすると、ハードウェアのセキュリティの問題があるが、例えば開成南小学校は新しいので、シャッターで学校用エリアと開放用エリアを区切れるようになっており、休みの日は開放エリアを自由に使える。どこの小学校でもそうなれば、ハードウェアとしての制約はかなりなくなるという気がする。だが、新しい学校ではない、既存の学校となると、いつ建て直すのかわからないので、学校を拠点といっても、学校側の事情としては、せいぜい譲歩しても日時限定でならいいですよというところまでではないか。となると、次のステップとしては、建て直す前までは日時限定で地域に開放して欲しいという形で話を進めるしかないのではと思う。次に、日時限定で開放することにした、使える場所はここですよ決めたとする。ではそこで一体何をやるのか。あくまでも生涯学習のためだから、今まで公民館等でやっていたような、踊りのおけいこ等をやるという話になってくるのだろうが、せっきやく学校にいるのだから、子どもたちと一緒に何かをやりましょうという企画が次のステップとして当然あると思う。学校を使って何をやるかという話になると、先ほど笹井委員がおっしゃったように、地域での目標

を決めて、お年寄りやお父さんお母さんといろいろな共同作業をする。今の子どもたちは穴掘り一つしたことがないらしいので、そういうことを経験させる場ということでもよい。アウトリーチというと、外のプロを呼んできて、小学校で見せたりしているが、そこまで大げさにしなくても、もっと気楽に、お年寄りが地域の歴史を話したり、地域に伝わる芸能に詳しい人などを呼んできてアウトリーチするのがよいのではないか。そういうことを地域に開放した学校の間でやっていく。最初の日時限定云々という話は誰と誰が話し合えばいいのか。それは学校の校長や教頭と、自治会が話せばいいのか、そこははっきりさせる必要があると思うが、その後、では開放されたところで何をやるのかについては、今度は地域側が企画検討する。それはもう学校と切り離されているから、地域で考えればいい話である。子ども達と何かやろうという話になった時に初めて学校側が出てきて、スクールボランティアの人達、地域の人達と協働して一緒に議論していく。今までの話を聞いて、そのように進めて行くことなのかなと思った。人材の負担軽減というテーマだったのだが、何が負担なのかということ具体的にイメージしていかないと、課題ごとに担当する人も変わってくるし、議論することもやることも変わってくるので、そこは切り分けて話さないと一般論の話になってしまうと感じた。

【木村議長】 イベントをやるから中学生を20人くらいボランティアでつけて欲しいと学校側にお願いすると、よく運動部の生徒達が来てくれる。今のところ中学校とはそのようなよい関係があるのだが、今、小学校とはそれが無い。最終的に地域が使えるようになるのは小学校である。それをどうやっていくのか。それは行政の方で詰めてもらいたい。早川小学校の話は、そろそろ動き出しているのか。

【関野部長】 今話の中でも、また前回の会議でも、学校を活動の場と言っているが、何も動いていないじゃないか、とご意見を頂いた。これについては、深野委員がおっしゃられたように、セキュリティの問題で地域の活動ができる場をつくりましょうということで、まずは1つ目として早川小学校をモデルケースにしていこうとして今動き始めている。それがどういう形になるか、実際の活動はまだ始まってないが、学校を開放しますよという事業をする。そこで、すぐに建て替えができなくても、こういうことができるという整備のモデル的なものができあがると思う。もう一つソフト的なところでは、実際に、部分的に、日時を限定しての開放だとか、そのような手続きの面から、順番に拡大していく。それしかないのではないか。そこで活動して、学校とさらに協働していくようなステップをイメージしている。そのあたりについてはまた笹井副議長からもアドバイスを頂

きたい。学校との関係においても、社会教育の会合は教育委員会がやる。ただ、現場では、学校に関しての責任者は校長であるから、当然両方がこういう方向で行きましょうと歩調が合っていないといけない。実際今の段階は、法律的な仕組みを超えたところで、現場のところでは、協働していかねばならないということで、進めている。今、深野委員から言われた、具体的にこういうところについて、教育委員会はどうか、学校はどうかということの整理が必要である。例えば頂いたご意見や提言の中から、具体的なステップを進めて行くのではないかと考える。社会教育のための開放の場として、教育委員会は学校をこう考えているのですよと、順番にステップを踏んで示していくのだと思う。

【笹井副議長】

学校と地域が連携する、協働するという場合、全国的にみると5つのパターンがある。1つ目は、学校の授業に地域の人が協力するパターン。授業、つまり正規の教育課程で協力するパターン。社会科で、地域の人に社会系のお話を話してもらったり、戦争体験を話してもらったり、理科の実験に参加してもらったりなど。2つ目は、昔自分が合唱をやっていたのでコーラス部を手伝うだとか、あるいは図書館で読み聞かせをすることとか、正規の教育課程ではないが、部活等の学校の教育課程を活動の場とするパターン。3つ目は学校の環境整備である。校門での声掛けから始まって、防犯パトロール、校舎・校庭の整備等、学校の環境整備をするのが3つ目のパターン。4つ目は、千葉県習志野市の話であるが、学校の空きスペースを地域住民の生涯学習スペースとして貸すという形。これは人と人との繋がりというより、地域のために、学校がスペースを貸すというパターン。5つ目は、学校から離れて、地域の活動に学校の教員や子ども達が参加するというパターン。このように、5つのパターンがある。それぞれ学校の教育課程へ関わり方の濃さ、深さ、広さ、施設を含める・含めないという視点があって、それぞれ分けて考える必要があると思う。それぞれみな繋がってはいるが、頭の中では少し分けて考える必要があると思っている。最終的な提言書をどう書くかは別にしても、分けて考えた方が分かりやすいのではないと思う。

ただ、それでも共通して言えることは、教員、校長、地域の人、保護者が対等な立場に立たないと、そういうボランティアな活動は長続きしないということである。そういう関係をどう作るのか。地域の関係を学校教育システムにどうやって持ち込めるかということが問題である。この時注意しなければならないことがある。最近はスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーという専門職の人を学校に導入しようという動きがすごく盛んになっているのであるが、そこには地域との顔の見える

関係は必要ない。専門家であれば、お金払うから誰でもやってくださいというものである。外の人を使うのだけれども、そこに地域の関係性を持ち込むわけではなくて、私はマネタリーと呼んでいるが、お金を払ってやってくださいという、通常の雇用契約を結ぶ。ところが地域の人が学校に入ったり、学校の人が地域で何かをしたりというのは、ボランティアの関係になるので、その時は対等な関係、顔の見える関係がないと結局駄目になる。教育は、対等な関係がないと長続きしない。子どもの成長は続いているので、教育も長続きしないと意味がない。どうしたら対等な関係を作れるのか。これは大変なことである。すぐできるものではなく、日頃からそういうものを作っていけないといけない。会社では偉かったかもしれないけれど、地域では対等に仲良くやりましょうという姿勢がとても大事である。

【木村議長】 骨子案全体としてどうか。

【深野委員】 笹井委員に質問であるが、5つのパターンでいうと、小田原はどれが多いのか。

【木村議長】 2つ目のパターンで、部活でバドミントンを教えている人はいる。地域の人が柔道を教えているところもある。3つ目の学校の環境整備であれば、小学校のPTA役員を終えると、おやじの会を作って、学校の修理や、ぼさぼさになっている木を切ったりしているところもある。4つ目の空き教室は、先ほど関野部長がおっしゃったことだと思う。地域の活動に先生が来るという5つ目のパターンは、例えば「クリーンさかわ」などには、大勢来てもらっている。全体としては見えないというだけで、それぞれのパターンについて、個々にはやっている。そのように実践的にやっているところはあるので、それらを各学校が少しずつ取り入れて行けば、地域と密接な関係が築けるし、顔の見える関係になってくると思う。

【深野委員】 笹井委員がおっしゃったように、1つ目から5つ目のパターンのうち、3つ目については、今はこのレベルだからここまで上げようだとか、当面は後回しにしようだとか、メリハリをつけた方がいいのかなという気がした。人材の負担軽減という話からすると、まさしくこの地域はこういう特徴があるから、まずは1つ目・2つ目・3つ目のパターンで頑張ろうというように、できることをやっていこうとした方が、それぞれの活動する人の負担は減るのかなという気がする。確かにばらばらとはやっている。思い出せば、確かにそうである。ただ、まとまりがない。こういう目で見えない。

【木村委員】 3つ目の学校整備は、生徒も一緒になってできる。おやじの会は、PTAを終えた役員がみんなやってくるので、人が足りないからたまには出て

きてよ、という誘い方がある。おやじの会と生徒とが一緒に木を切るという形でやるのがいいのかもしれない。

【柏木委員】 おやじの会もあるのだが、もう少し市役所の方で施設整備をしてほしい。お金を出して欲しい。大きな木を切ると、それを処分するのにもお金がかかる。やはり行政でしっかり手当すべきものは手当してもらえないかというのが本音である。

【関野部長】 環境部と連携して、環境事業センターのボランティアゴミとして、できることはある。

【柏木委員】 木を一本切るとゴミの量がすごい。ああいうものをなぜ市役所で切らないのかという話になってきてしまう。あまり負担の大きなボランティア活動を市民にさせてしまうと、不平不満に繋がる。そこそこの手伝い程度にしたほうがよい。問題が起こらず、一日や半日で終わる程度の活動の方がよい。最近そのような意見が耳に入ってくる。

【木村議長】 ある中学校では、荒れた時期があって、壁に開いた穴がすごい状態だった。そうすると、おやじの会がペンキと板を持ってきて、ちゃんと張り付ける。全員ではなくとも、そうやってみんなとうまく繋がっていけばいいのかなと思っている。

【柏木委員】 市役所でやることと、父兄がやることで、生徒に与える影響も違うのではないか。そのような考えもあって、お父さん達頑張っておだてている。

【深野委員】 親が子どもに、無償で世のため人のために働くことは大事なのだということを見せることが必要だと思う。子どももそれに巻き込まれていくという体験をしないと、大人になって、無償で働くことは身につかない。

【土橋委員】 骨子の中に、先ほど笹井委員がおっしゃった5つのパターンを盛り込んだ方がわかりやすいと思う。それぞれの地域で話し合っていく上で大事な視点である。どういうことをどのようにやろうかと考える際のきっかけになる。骨子案にそこを盛り込んではいかがか。

【木村議長】 では、事務局で、骨子案に5つのパターンを盛り込んでいただくという事でお願いします。

協議事項4-（1）についてはここまでとさせて頂く。次に協議事項4-（2）生涯学習センター分館及び図書館分館の今後のあり方について事務局より説明をお願いします。

## （2）生涯学習センター分館及び図書館分館の今後のあり方について

（非公開）

【木村議長】 質問尽きたようなので、ここまでとさせて頂く。みなさんから何かあるか。  
なければ事務局から何かあるか。

生涯学習課長からキャンパスおだわら事業協働実施団体選定の審査委員について説明

生涯学習課副課長から二宮金次郎の映画製作について説明

事務局から次回会議は1月下旬頃を予定しており、決まり次第連絡する旨説明

【木村議長】 それでは、これで社会教育委員会議を閉会とする。